

令和5年度 「学校関係者評価」

	項 目 (重点としたものに○)	自己評価 (学校の目標達成状況及び学校の取組の適切さ、 改善方策について等)	外部評価者からの意見・指摘
教育環境の充実	①学校安全の推進 ○	「いのち」を守ることを最優先にし、あらゆる教育活動を実施するよう、年度当初から全教職員へ伝えてきた。その基本的な考え方については、多くの教職員の気持ちに根付かせることが出来たと考えている。毎月の職員会議の際に設けられた事故防止会議は、校長からの連絡・報告等とは別に必ず行った。不祥事防止に関わる案件を取り扱うことが多かったが、学校事故に関わる案件も取り上げ、本校における同様の事故発生の可能性や仮に発生した場合の対応等を指導した。事故防止会議以外でも、週一回の職員打合せの中で、学校や地域で発生した事故もタイムリーに取り上げた。学校安全を担保する器具（さすまた）等を増やすなど、ソフト面もハード面も充実させるべく努めたので、前年度に比較し、学校安全を推進できたと考えている。	①学校安全の推進 ・「いのち」を守ることを最優先にすることを学校安全の中心に置いている点が評価できる ・そのことに関する教職員の見解の合意を得るための会議の方法も的確であると判断する ・現状での対応だけでなく、予測不可能な案件への対応をさらに強化することを期待する ・安全対策のためのハード面、及びソフト面での対応の充実も評価できる ・いざという時に、どこに避難することになっているのか分かっていない保護者も少なくない。場面に応じた避難の仕方を周知してもらえそうな手段（マニュアルやフローチャートなど）を提示する工夫が必要である
	②教育情報化の推進	ICT 機器の授業における使用実績は、校内研修講師のお墨付きをいただけるレベルに達している。授業外の活動（委員会活動等）でも様々な場面での活用があり、逗子市内では進んでいると自負している。PC やタブレットを校務の中で使用する場面も多く見られる。端末から同時に情報共有できるので、教職員の働き方改革や業務の効率化、ペーパーレスの一助になっており、活用の方法や場面などさらに探っていきたい。	②教育情報化の推進 ・授業、及び授業外活動における使用実績は高く評価できる ・教職員への伝達も同時共有できる点は優れていると思われる ・一方簡単に伝達できるため、大量の情報が伝達され、情報過多に陥らないようにする配慮が必要である ・情報の重要度や優先順位などが情報とともに明示されることも必要である
	③地域との協働推進	全学年で外部講師を盛んに活用している。外部講師の活用イコール地域との協働とは言えないが、専門的	・伝達のペーパーレス化によってかえってペーパーの必要性が起こることがないように注

		な知識やスキルをお持ちの外部講師の活用は、児童にとってもよい刺激を与えることができている。一方で、地域講師の活用に頼りすぎていくことは否めず、各教員の教材研究や教材準備については、十分行っていく必要を感じている。 地域で行われている会合には極力参加し顔の見える関係性の構築に心がけた。また、学校施設（主に体育館と校庭）を貸出し、保育園・幼稚園の運動会や地域の運動会を開催した。	意する必要がある ③地域との協働推進 ・外部講師や地域交流の推進は評価できる ・外部教師と教員との連携活動を重視した活動を常に考えていくことが望まれる ・学校施設の地域等への貸し出しは必要であるが、教職員への負担が大きくならないように配慮する必要がある ・自己評価で言及しているほど、地域講師や外部講師の活用が多いとは思わない。講師に丸投げしておらず、各学年の担当教員が上手にコーディネートし、学習した内容を効果的に児童に定着できるよう努力している。専門的な知識やスキルに触れることができるのは、児童にとってもプラスになり、学習効果が上がると評価できる。教員の働き方改革にもつながっていると思われる ・昨年度は、保護者（PTA 役員）が、児童会の意見を聞き、児童のアイディアを実現した実績があった。今年度は児童会と PTA の接触の機会がなく残念であった。児童の考えが様々な場面で採用されることが、児童会活動へのモチベーションが上がる。児童会がうまく機能し、より自由な活動ができるように PTA としてもサポートしたと考えている ・地域主催のイベントを通じて、地域と学校と繋がっている。イベントの実施にあたっては、保護者（PTA 校外委員会）の協力が有り難かった。地域講師として授業にも参加するき
	④学校評価を生かした学校づくり	前校長からの引き継ぎや教頭から前年度の様子などを聞く中で、前年度からの懸案事項や課題を改善すべく学校経営を行ってきたが、必ずしも前年度の学校評価を生かした学校づくりを行うことができたとは言い難い。次年度は学校関係者評価委員による外部評価と保護者アンケートによる評価を念頭によりよい学校づくりを行っていきたい。	

			っかけとなっている。 ④学校評価を生かした学校づくり 学校評価や保護者のアンケートは、単にその年度の評価にと留まることなく、次年度に向けての改善点を示している。評価やアンケート内容を生かした学校づくりを希望する
一 学習指導の充実	①授業改善の推進 ○	GIGA スクール構想以降、ICT 機器が授業の中で使われることが一般的になった。今年度は校内研究の中で情報活用能力の育成を副題に授業改善を進めてきたが、質の高い授業実践が行われたとは言い難い。 国や県が推奨している（高学年）専科や授業交換を特に3学年以上は積極的に取り入れ授業を行なったが、学年の教員全員で同じ教科の教材研究・教材準備ができるという小学校の良さを引き換えにしていることは否定できない。次年度は基本に戻し、国語科の授業の在り方を研究し授業改善に努めていきたい。	①授業改善の推進 ・ICT 機器を活用した授業運営の推進と同時に、必ずしも ICT 機器の活用が進んだ授業が優れた授業とは言えない点の検討をする必要がある ・専科制や授業交換制の利点と同時に欠点についての検討がなされている点は非常に評価できる ・小学校教育としての授業運営の再検討に期待する
	②健康体力づくりの推進	各学年の発達段階を意識した健康体力づくりを、体育科の授業を中心に取り組んだ。特に中学年は、中学校で長年指導していた体育専科教員を配置し、より専門性が高い体育の授業実践を行い、児童の健康体力づくりに関する意識も高まったと考える。しかしながら、学校全体として健康体力づくりを意識した取り組みを行ったとは言い難く、次年度への課題が残ったと考えている。	②健康体力づくりの推進 ・体育の授業における健康体力づくりの推進はすばらしいと感じる ・体育の授業での体力づくりには限界あるため、児童の「遊び」や日常の生活の中に、体力づくりの機会を確保することに注目してほしい

	③体験活動の充実	外部講師をお招きし、各学年ともかなりの体験活動を行っていた。また、夏期休業期間中の前半に、サマースクールを開講し、体験活動の機会を作ることが出来た。サマースクールに係る準備や運営については一部の職員にかかる負担が大きいので、次年度以降の実施については準備や運営方法を工夫していく必要がある。	③体験活動の充実 ・児童の学びにとっての体験学習は非常に有用であるため、体験を重視した活動の実践は評価できる ・サマースクールなどの運営は教員の負担が大きくなるため、一部の教員が担当するのではなく、教員のグループによる運営などの検討をすすめてほしい
	④今日的課題への取り組み	新型コロナウイルス感染症の感染拡大の懸念があった際、様々な教育活動が制限され、本校でも工夫しながらの教育活動が展開されてきた。昨年5月8日以降、新型コロナウイルス感染症の5類移行以降、少しずつ、制限・工夫された教育活動が少しずつ元に戻りつつある。コロナ禍の間工夫してきたことを大切に、単にもとに戻すのではなくより質の高い教育が提供できるよう努めていくべきであると考えている。	④今日的課題への取り組み ・コロナ禍による教育の変化に対して、5月8日以降の教育を、コロナ禍以前に戻すのではなく、より質の高い活動へと進めることへの取り組みを高く評価する
Ⅱ 支援の充実	①支援環境の充実	児童指導支援部を中心に支援環境の充実に向け努力しているが、本校の環境（オープン教室や教室不足など）を物理的に改善することは難しく、工夫の範疇に留まっている。支援環境を充実させるため、支援教室（リソースルーム）の開設などが課題となって来るが、本校では開設する場所が頭を悩ます課題となっている。	①支援環境の充実 ・支援教育への取り組みに対しては高く評価している ・さらに充実させるためには経済的な面と、人的な面での支援が中心的な問題となる

	②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進	すべての児童にとって、在籍する学級や学年が安心できる、魅力ある居場所となるよう、学級経営及び学年経営を行っているが、不登校や登校渋りの発現から、必ずしも学校側の考える居場所にはなっていないようだ。校内に「リソースルーム」のような居場所を作ることも検討しているが、その部屋の確保が物理的に難しかった。 本校では、毎年異年齢による活動（たてわり班活動）を実施しているが、特に高学年が下学年の児童を面倒見て様々な活動を行っている姿は大変微笑ましい。一年間をかけて高学年児童の責任感などが強くなり、絆が深まったと考えている。	②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進 ・不登校などの児童に対する対応には、対応する場所と担当教員が必要であるため改革には学校だけで行うことが非常に難しい ・異学年交流の活動は児童の発育にとって大変適していると評価できる ・兄弟姉妹がいても、年齢を入れ替えることはできないが、異学年交流では年齢としての立場が変わることが出来るため、末っ子でも兄や姉になることが可能である ・以前、各委員会の委員長が、委員会の活動を全児童に向かって話す場面があり好評だった。低学年児童に上級生の姿（数年先の姿）を見せることは、大変刺激になり有効である
	③いじめ対策の推進 ○	未然防止のための日々の取組等が大切であることは言うまでもないが、いじめを認知した際も早期の対応を行うことが出来た。児童指導支援部を中心に組織的に対応を検討し実施した。対応のひとつとして、校長が学年指導を行う場面を作った事案もあった。いじめに限らず、校長が児童に様々な事柄をタイムリーに語りかえる機会が必要であると考えるので、次年度はこれまで控えていた月例の朝会を復活させ、かかる機会を作りたいと考えている。	③いじめ対策の推進 ・いじめの未然防止の取り組みについては高く評価できる ・校長が児童に定期的に話す機会をもつことは非常に重要であり、教員全体にも校長の考えや姿勢を伝え、学校としての対応を作り出す機会になっている

④不登校対策・問題行動対策の推進	不登校については、新規の不登校児童が出現しないよう、魅力ある学校づくりが対策のひとつと考えているので、その実現に向け日々努力してきた一年だった。しかしながら、不登校の出現率は必ずしも低くならなかった。安心できる居場所の設置など、新たな一手を講じる必要性を感じている。 暴力等をはじめとする問題行動については、日々未然防止に努めてきた。教職員の努力により前年度に比べ大きなトラブルが少なく、比較的落ち着いた一年となった。定期的開催した児童支援会議の際に、全教員の共通理解が必要な児童の情報交換を行い、不登校や問題行動に繋がらないよう対策に努めてきた。児童指導支援部がそれぞれの対策の中心となり組織的に取り組むことが出来たと考えている。各学年とも対応をする必要が生じた際、適切に対応することが出来、大きな問題に発展しないよう努めてきた。	る点が非常に評価できる ・朝会や儀式的行事などで、全児童と全教員が一か所に集まり、話を聞く時間は必要なことと考える。児童や教職員の人数が多い逗子小学校の移動時の大変さは理解できるが、有事の際は混乱するのは必至。混乱のシュミレーションにもなる。 ④不登校対策・問題行動対策の推進 ・不登校児童への対応は非常に難しいため、保護者との定期的な面談などが期待される ・不登校の原因がいじめによるものでないことの確認もする必要がある
⑤幼・保・小、小・中の連携推進	市教育委員会が主催する担当者会議に担当が参加し連携および情報を共有してきた。1学年の教員が市内の幼稚園・保育園を訪問し保育の様子等を参観させていただく機会を本年度も設けたが、卒園した幼稚園・保育園の先生方に学校の様子を見ていただく機会は設けることが出来ず今後の課題と考えている。2月には、小学校の環境に園児が慣れるために「ようこそ集会」を企画し連携を図ることが出来た。市内の数園の運動会に本校の校庭や体育館を貸し出しているが、それを以て連携とは言い難い。	⑤幼・保・小、小・中の連携推進 ・各部署との連携の推進が行われていることは評価できる

三 学校組織の充実	①学校・学年・学級経営の充実	学校経営の方針を年度当初に全教職員へ提示・説明し、本年度の本校の教育活動を開始した。後期始まり等区切りの場面で、再度教職員に意識させることに努めてきた。 年度の始めに学級経営の方針（学級担任外は専科指導方針）を作成・提出させているが、管理職どまりとなっている。それぞれ参考になることが多く記載されているので、次年度は全職員で共有していきたい。	①学校・学年・学級経営の充実 ・学校経営方針の作成については評価できる ・全教職員が学校の経営方針を熟知し、同じ方向を向いて学級経営や保護者対応ができるようにすることが重要である
	②研究・研修の充実	市教育委員会から委託された研究を中心に校内研究を進めた。本年度を含め３年間をかけて同じカテゴリーで研究を進めてきたが、指導・助言を依頼している講師からはかなり充実していると評価をいただいている。研究によって得られた成果が一時のものにならないよう今後の本校における教育活動の成果として根付くようにしていきたいと考えている。今年度までの成果を次年度の研究へと繋げていきたい。	②研究・研修の充実 ・研究の推進については、以前から英語教育での対応に参加させていただいてきたこともあり、実情も多少は理解しているため、高い評価をしている
	③信頼に基づいた指導の推進	本校において本年度体罰事案はなかったものの、不適切であると言わざるを得ない対応事案は少なからずあった。不適切を考えられる事案については、職員会議や事故防止会議、週例の打ち合わせ時に話題に資自分事として捉えさせてきた。信頼を損なう対応が起こらないよう、教員自ら研鑽を積ませるほかに、学校として研修を進めていく必要を感じた。次年度の課題の一つと考えている。	③信頼に基づいた指導の推進 ・不適切な指導がないよう、今後も教員の資質向上に努めてほしい
	④働き方改革の推進 ○	勤務時間外の勤務をせざる終えない状態を改善することが出来なかった。スクールサポートスタッフの配置により、教員がしなくともよい仕事を代わりに対応していただくことができ、大変助かったと考える。しかしながら、市内の小・中学校の中で学級数が最大の本校では、	④働き方改革の推進 ・働き方の改革には学校現場としての対応と同時に、教員自身の改革意識を高める必要がある ・日本の教員の勤務時間は先進国中最長であるといわれていることを決して良いことと捉

		どの学校にも一律に配置されたスクールサポートスタッフでは、全ての教員のニーズに応じることは難しかった。退勤後に仕事を続けている教職員が多く、退勤しづらい雰囲気になっていると感じている教職員が多いと認識している。改善できるよう次年度対策を講じていきたい。	えない。教員の意識を高めることが重要である
--	--	---	------------------------------